

「信じて求めて」ーマタイによる福音書講解説教 86ー

ホセア書 第9章 16節～17節  
マタイによる福音書 第21章 18節～22節

説教 岡村 恒 牧師

「祈のとき、信じて求めるものは、みな与えられるであろう」(22節)。主イエス・キリストが弟子たちにおっしゃった言葉です。

主イエスは十字架に架けられて死ぬ為にエルサレムに来られました。大勢の群衆に迎えられ、私の家は祈りの家だと言って神殿を清められました。そしてこの日、弟子たちに向かって、本当に必要なものを神に祈り求めたら良いと語られました。神を信じ、祈り求めなさい。全能の神には何でも出来ると。

この日、主イエスはいちじくの木をご覧になりました。空腹を覚えて近づいてみるとそこには実が一つもついていませんでした。日常生活でよく経験する場面です。何かを期待して近づいてみると何一つ得られず、がっかりするのです。主イエスは、このいちじくの木に、私たち自身を重ねてご覧になったのでしょうか。葉が茂り、いかにも実が実っているように見えながら、本当はただの一つも実りがない。信仰深く生きていながら、神が期待する実がそこにはないのが私たちです。主イエスはこの世を、ぶどう園にたとえてお語りになりました。神が農場経営をする話です。神にすべてのものを委ねられながら、神のものとして認めず、自分のものであるかのように思い違いをし、神の預言者を追い返し、神のひとり子を十字架にかけて殺してしまう。私たちの罪の姿です。主イエスがこの日、いちじくに向かってお語りになった呪いの言葉は、私たち自身が受けるべき神のさばきの言葉でした。

この日、主イエスは弟子たちを、既になえられたと信じて歩む生活へと招かれました。私たちの救いを考える時に主イエスの言葉は決定的な意味を持ちます。信じて祈れ、既になえられたと信じよ、そうすればその通りになると言われた時、私たちに信仰の熱心さや祈りの力を求めてはおられません。主イエスは山を動かせと命じられたものではありません。神を信じて、求めたら良いと言われたのです。

私たちは礼拝のたびごとに、全世界のキリスト者と共に、「我は天地の創り主、全知全能の父なる神を信ず。」と告白して歩んでいます。私たちの人生のどんな瞬間も、神の御計画と無関係な瞬間などないのです。私たちの髪の毛一筋ま

で知り尽くしておられる神がおられます。全知全能の神を信じると告白しながら、なお自分の人生に神と無関係な余白があるなどと考えるなら、それは大きな思い違いです。

いちじくを枯らしてしまう主イエスは、すべてのものを支配する権威をお持ちでした。何ごとも、できないことがない父なる神に等しいお方です。病人の病をいやし、生まれつき目が見えなかった人の目を開き、歩けなかった人を踊り上がらせ、悪霊につかれた人を自由にし、死んで墓に葬られていた人を生き返らせて呼び出されました。父なる神の力を、誰よりもよく御存知だったのは主イエスです。弟子たちもまた、その力を味わってきました。

主イエスは、この神の力が私たちの救いのために発揮される、とお語りになりました。さばかれ、滅びるべき者が赦され、命を与えられるという奇跡は、ただ神の力によってしか実現しないことなのです。「まず神の国と神の義とを求めなさい」(マタイによる福音書 第6章33節)と言われた主イエスは、「祈りについて」教えられたのではなく、祈りが聞かれる「救いの確かさ」をお示しになりました。「また、祈のとき、信じて求めるものは、みな与えられるであろう」。(22節)という主イエスの言葉は、そのまま信じて良い言葉です。

信仰の深さや熱心さは、この言葉に登場しません。信じる信仰を与えて下さいと祈り求めて良いのです。神はあなたを救うことの出来るお方、あなたにこの救いを信じる信仰を与えることの出来るお方だからです。既に受けたこの信仰は聖霊によって与えられた信仰です。祈り求めるならば必ず与えられる信仰です。主イエスは天にいます神があなたを赦すことの出来るお方と信じて良いと言われました。

私たちはこの招きに応えて良いのです。主イエスの招きほど確かな、裏切られることのない招きはないからです。祈ることなど許されない私たちが、ただこの招きに応えて信仰を告白して生きる為に、主イエスは自分の身を投げ出して下さいました。私たちの救いはもう成就しています。既に与えられた救いです。私たちはそれを信じて良いのです。

(記 岡村 恒)